



No. 12 (2008年10月)

九州大学大学院言語文化研究院のニュースをお届けする広報誌です。Web版はこちら <http://www.flc.kyushu-u.ac.jp/~koho/>

## 研究院長の就任あいさつ

### ヴォルフガング・ミヒェル

私は長年の間、研究と教育の仕事に専念させていただき、このような責任の重い管理職に就くことなど考えもせずに過ごして来ました。選挙の結果を受け研究院長に就任してから半年以上経っても、多くの同僚から寄せられる期待にどう応えていくべきかという不安を常に抱えています。転換期に入った日本の大学の中で本部局がこれまで築いてきた業績や、抱えている問題などを把握した上で、部局内外からの意見や要望を参考にしつつ、幅広い視野を持ってこれから進むべき方向を明らかにして、部局の全教員が共有できる新しい未来像に繋がる土台作りができればと考えています。在任中の2年間(平成20、21年度)は、伊都地区への移転、第1期中期目標中期計画の実績報告、第2期中期目標中期計画の作成など一連の大きな課題が山積しておりますが、副研究院長の松村瑞子教授と山村ひろみ教授の献身的な協力も得て、九州大学の発展にできる限り貢献していきたいと思っています。

2008年10月吉日

## 新任教員のあいさつ・自己紹介

### 鎌田裕文

(言語文化研究院助教 2008年4月着任)

初めまして、今年度4月より言語文化研究院箱崎分室に赴任致しました鎌田裕文です。お蔭様で2学期目を向え漸く言語自由選択科目の受講者対応にも慣れて参りました。弱輩ではありますが、分室一同誠心誠意受講者へのより良い教育環境を提供して参る所存です。今後とも分室のご支援、ご協力の程何卒宜しくお願ひ申し上げます。

### Matthew Armstrong

(高等教育開発推進センター准教授 言語文化研究院兼任 2008年4月着任)

My name is Matthew Armstrong, a Canadian who has been living and working in Fukuoka for the past 10 years. I have been teaching at Kyushu University since 2006. I am currently Associate Professor in the Research and Development Centre for Higher Education where I divide my time between the Hakozaki and Ropponmatsu campuses. My Graduate level background is in Education, specifically TESOL, where I concentrated in aspects of academic writing and learner psychology. My recent research has involved learner value assessments and action research incorporating Lev Vygotsky's Zone of Proximal Development and Social Constructivist theories.

### Michael Guinn

(言語文化研究院招聘外国人教師 2008年10月着任)

My name is Michael Guinn. I am from San Diego, California. My hobbies include writing poetry and songs, composing instrumental music, reading history books on Byzantium and the Italian Renaissance, and watching films from all over the world. I also study Japanese and Italian in my spare time. It is a pleasure to be a member of the Kyushu University community, and I look forward to meeting everyone.

### Mark Weeks

(高等教育開発推進センター准教授 言語文化研究院兼任 2008年4月着任)

私は英国で生まれ、5歳から、30年以上でオーストラリアに住んでいました。2008年3月にオーストラリア市民権を貰いましたので、私は現在、イギリス人でもおかつオーストラリア人でもあります。私が大学で専攻したのは英米文学、とくに19、20世紀のアメリカ文学でした。しかし、博士課程に進学してから私の専門分野は笑いに関係したと、とくに、笑いに関する学術的な研究になりました。九大に就職する前、私はタイの大学(3年間)と名古屋大学(5年間)に勤めていました。英語について問題や質問があれば、いつでも聞いてください。

# 人間環境学府国際社会開発プログラムについて

2008 年度前期より人間環境学府において国際社会開発プログラムが全学の大学院生を対象に始まりました。このプログラムは国連組織での実務経験がある言語文化研究院の教員たちが中心になっており、専門的知識・能力を持つ大学院生が将来国際協力の現場で活躍できるように、1) 国際協力における社会開発に関する知識、2) 異文化理解の技法、3) 外国語(英語)運用能力を身につけてもらう内容になっています。22 単位を修得すると人間環境学府長からプログラム修了証が交付されますが、1 年目ですでに修了者が誕生する見込みです。

同時にプログラムの中心的な科目からなる大学院共通教育「国際協力・社会開発」科目群もスタートしました。こちらは 10 単位を修得すると九州大学総長から科目群修了証が交付されます。

国連組織や国際協力関連の政府組織・主要 NGO は東京に集中しているため、関東地方の学生は様々なセミナーや活動に容易に参加することができます。しかし途上国の人々の力になりたいという熱いハートと有用な専門知識・能力を持つ学生は日本全国に、もちろん九州大学にもいます。国際社会開発プログラムはそのような学生のために生まれました。

プログラムの教員全員で担当する「社会開発概論」は、当初その入門的性格から学生がほとんど集まらないのではと心配されましたが、ふたを開けてみると一般の大学院生に加え、社会人学生や学部生、職員の方まで参加する人気科目になっています。来年度は人間環境学府・農学研究院・システム情報科学研究院・国際交流推進室・アジア総合政策センターなど学内の他部局で国際協力を携わっておられる先生方にもご参加いただき、さらにパワーアップする予定です。

同様に来年度からは「国際協力インターンシップ」科目も始まり、より現場に近い教育を目指します。

受講者のほとんどは単位取得が目的でなく、また 6 時限・7 時限という夜間の時間帯の授業があるにもかかわらず、前期だけで 12 の学府からのべ 91 名が参加しました。専門を異にし、日頃は互いに接点のない多様な学府の学生が国際社会開発プログラムの授業の中で意見を交わす様子は、私たち教員に学際的研究・教育の醍醐味を味わわせてくれます。近い将来、彼らの中から開発専門家として国際協力の現場で活躍する人材が輩出することを期待しています。

(文責：阿部吉雄)

## 釜山大(韓国)との共同遠隔授業

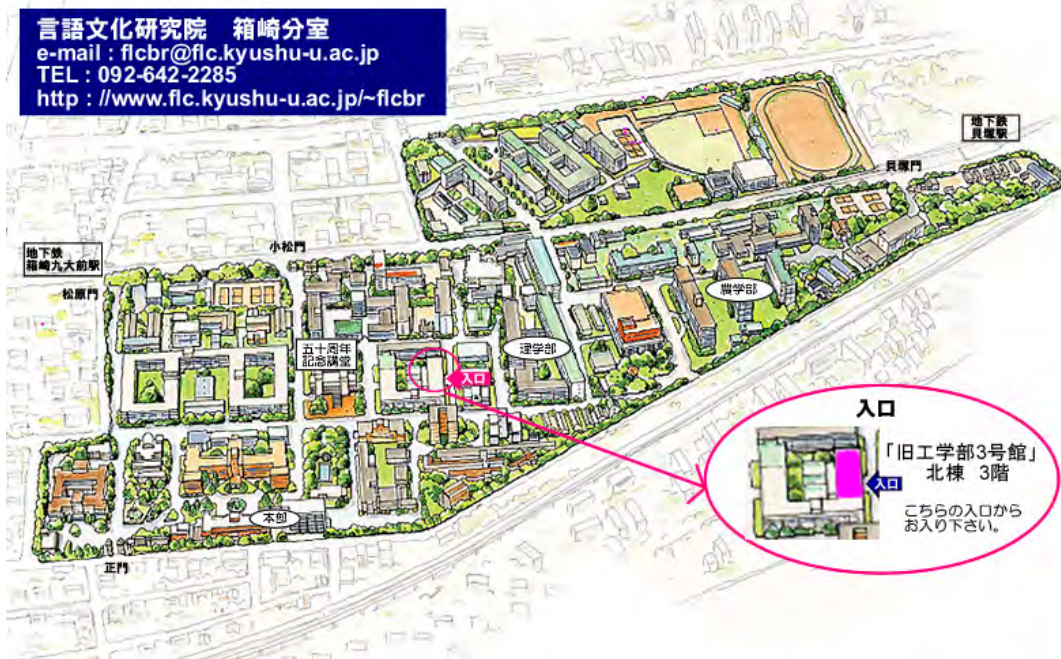
### 「Japan-Korea Relations in the Era of East Asian Community」開講

言語文化研究院の曹美庚(CHO Mikyung)准教授がコーディネーターとなり、昨年に引き続き、今年度後期に釜山大学校との共同授業「Japan-Korea Relations in the Era of East Asian Community」が開講されています。この講義では、九大・釜山大から各 7 名(合計 14 名)の教員が相互にキャンパスを訪問し、リレー講義形式により歴史や政治、経済、産業、貿易、法律、教育、言語、文化など多岐に渡る分野の現状認識について講義を行い、東アジア地域において共存共栄し続ける未来志向的な日韓関係の将来展望を試みています。講義は英語で行われています。

## 箱崎分室移転

箱崎地区キャンパスで多様な外国語科目を提供し国際協力相談室を設置している言語文化研究院箱崎分室が平成 20 年 3 月に移転しました。新しい分室の事務所及び教室は「工学部 3 号館北棟 3 階」にあります。いままでもより明るく快適になりましたので、より一層の利用が期待されます。詳しい場所は、地図をご参照下さい。

(箱崎分室 HP <http://www.flc.kyushu-u.ac.jp/~flcbr/>)



建物の入口は理学部方向の出入口となります。ご注意ください。

## QUEST-MAP 始動 言語文化研究院の将来像を描き出すために

言文の全構成員が、言文の置かれている現状を把握し、その情報を共有し、言文の将来構想に関する合意を形成するために、QUEST-MAP の取り組みを始めました。九大の経営戦略グループという言文組織外の第三者からの視点を有効に活用しながら、夏休み前より数回のワーキンググループで準備を進め、9月17日に第1回、10月30日に第2回言文FDとしてQUEST-MAPの全体会合を実施しました。現在も将来構想のためのブレーン・ストーミングや言文あるいは九大内外の様々な情報調査を通じて、言文のベンチマークを続けています。来年6月頃には言文の進むべき将来像のスケッチが出来上がる予定です。歯学研究院や農学研究院でも有効に活用されたこのQUEST-MAPという手法の紹介を、九大のHPから下に引用します。

(文責：福元圭太)

「QUEST-MAP」は、九州大学の今後の方向性や主要戦略目標を、バランス・スコアカード(Balanced Scorecard、略称「BSC」)のフレーム・ワークを活用して一覽で指し示した、いわば「総見取り図」です。BSCは、組織の「ビジョン(方向性)」と「戦略目標」を明らかにし、次に、それらを「戦略マップ」という戦略の系統図に表現することで、組織の構成員一人一人にこれらを効果的に伝達し共有することを促します。そして誰もが戦略目標を意識して主体的に行動し、設定した目標に照らしながら成果を検証していく点にBSCの特色があります。

我々は、このような機能を有するBSCを活用して、九州大学が目指す「継続的な組織の変革と個人の成長」を実現するための道筋を可視化し、大学の構成員一人一人がこれを理解共有することが非常に大切であると考えます。そのために作成した九州大学版BSCが「QUEST-MAP」です。

### (参考) QUEST-MAP の名称について

「QUEST」は、探求・追及という意味。したがって「QUEST-MAP」は、「九州大学のビジョン・将来像を探求して描いた地図」という意味です。さらにこの言葉には、次の様な8つの英単語の頭文字の省略形としての意味も込めています。

Q: Kyushu	「九州大学オリジナルな」
U: University	
E: Empowered	「一人一人が力を発揮できる」
S: Strategy	「戦略性を備えた」
T: Team	「組織体」を目指すためのMAP
M: Mission	「使命」
A: Action	「実行」
P: Passion	「情熱」

### (九大HP「QUEST-MAP」より)

<http://hyoka.ofc.kyushu-u.ac.jp/QUEST/>



(Quest-Map FDで意見を整理する参加者)

## 全学教育活動表彰受賞者に言文准教授3名

平成19年度全学教育活動表彰受賞者として次の方が選出されました。日ごろの言語文化教育の成果が認められたものです。受賞者の方々おめでとうございます。全学教育優秀授業賞(全学教育科目において優れた授業を実践したと認められる教員)

前学期 秋吉 収准教授「中国語Ⅰ」

後学期 曹 美庚准教授「韓国語Ⅱ」

## 受賞者からのメッセージ

このテキストは、2000年に当時の「英米言語文化演習Ⅰ」のテキストとして編纂された*A Passage to English*の改訂版です。初版から4版まで若干の手直しを経てきましたが、新たに立ち上げられた5名の英語科教員による編集委員会のもとで既刊本の大幅な内容の見直しが行われ、2007年に内容・構成を刷新した第5版が刊行されました。現在は、英語新カリキュラムの「英語Ⅰ」の授業で使用されています。九大英語科の現教員および元教員が書き下ろした「英語の音声」「英字新聞の読み方」「電子メールの書き方」「英米文化」など、九大生に

全学教育功労賞 教科書部門(全学教育科目において使用された教科書のうち、優れたものであると認められる教科書を著した教員)

江口 巧准教授 *A Passage to English* (第5版)

曹 美庚准教授 『キャンパス韓国語』

とって今後の英語の学習に不可欠な情報が盛り込まれていますので、学生には英語Ⅰの学習が終わった後も、常に座右に置き、必要な折に参照してもらいたいと思います。

今回この賞を受賞するにあたり、ともに編集に携わり汗を流していただいた田中・大津・志水・鈴木先生、および当テキストの原稿を寄稿していただいた英語科の先生方に深く感謝申し上げます。

(江口 巧)

## 第1回生命倫理国際ディベート大会開催 安楽死法制化論題で九大医学部生が活躍

2008年3月17、18日に六本松キャンパスにおいて、言語文化研究院後援により国際生命倫理ディベート大会が開催されました。大会結果の概要は下記のとおりです。詳細はWebをご覧ください。大会の一環として、3月17日には京都大学カール・ベッカー先生に「安楽死論争をめぐる問題」と題して英語でご講演をいただきました。内容だけではなく、スピーチとしても感動的なすばらしいものでした。また、決勝戦の後には、九州大学病院の外科医でもある清水周次先生に医療関係者の立場から貴重なコメントをいただきました。**論題**：「安楽死は法制化すべきか」(Should euthanasia be legalized?)

**主催**：九州大学 P&P (教育研究プログラム・研究拠点プロジェクト)「生命倫理を主題とする内容重視の言語指導教材・プログラム開発」(研究代表者：言語教育学講座教授・松村瑞子)

**後援**：九州大学言語文化研究院 **協力**：九州大学 ESS (詳細は下記Web 決勝戦のビデオも公開しています。 <http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~inouen/bioethics/>)

9チーム(国内5、海外4)から予選により選ばれた4チームで準決勝お行い(韓国チーム(予選1位)対慶応・九大チーム(予選4位)と米国チーム(予選2位)対英国チーム(予選3位)が対戦)決勝は肯定側慶応・九大チーム(鈴木雅子(慶応SFC)・石島洋輔(京大

卒、九大医学部1年)対、否定側米国チーム(ジョン・ペイトマン(ジョンズ・ホプキンス大卒、ハーバード・ロースクール在籍)・アダム・ボニフィールド(コーネル大卒、ケンブリッジ)大修士修了)が対戦しました。聴衆、参加チーム、専任審査員の投票の結果、否定側米国チームの勝ちとなりました。また、予選参加全チームから、最優秀ディベーターとしてキム・アヨン(韓国梨花女子大(Ewha Womans University)学生)が選ばれました。

現在、第2回大会を計画中です(「お知らせ」参照)。



(国際生命倫理ディベート大会に集った各国からの参加者)

## 九大チームが英国チームと対戦 英語ディベート・セミナー開催

2008年10月7日、九州大学六本松キャンパスにおいて、言語文化研究院と日本英語交流連盟の主催により、英国 English Speaking Union 派遣のディベートチームを迎え英語ディベート・セミナーが開催されました。( <http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~inouen/esuj2008kyushu.html> ) 学生、教職員をはじめ学内外ののべ120名程度がコミュニケーションの訓練としてのディベートを学ぶとともに、生命倫理に関する論争に耳を傾けました。

Session 1 ではミヒエル研究院長の挨拶の後、ESU(英国英語交流連盟)の Andrew Fitch 氏がディベートについて簡単な講義を行い、続いて癌告知の是非(Motion: This house believes that cancer patients should be informed of their diagnosis and prognosis.) についてディベートが行われた。九州大学 ESS チーム(田中 美彩都 文学部2年、落石龍太郎 薬学部2年、永田望 法学部2年)が肯定側に立ち、来日中の英国 ESU チーム(Ben Jasper, Oxford University; Melanie Bunce, Oxford University; Fred Cowell, BPP Law School)が否定側に立って議論を展開

しました。Session 2 では、ディベートについて九大学生による日本語講義(中里博史 総理工修士2年、宮本祥 法学部3年)の後、同じ癌告知の論題についてオックスフォード大学院生チーム対英国現役弁護士チームが模範ディベートを披露しました。肯定側は Ben Jasper と Melanie Bunce、否定側は Fred Cowell と Patricia Edwards (Inner Temple)。



(九州大学チームの肯定側スピーチ)

## お知らせ

### 第2回英語プレゼンテーションコンテスト (2009年1月10日)

英語能力の向上を目指す言語文化教育、特に英語 IIA、IIIA における成果を公開する場として、英語プレゼンテーションコンテストを昨年度に引き続き六本松キャンパスで開催します。詳細はHP やポスターでお知らせします。

### 第2回生命倫理国際ディベート大会 (2009年3月8~14日)

安楽死の法制化の是非についてディベートワークショップをと公開のディベート大会を開催します。講師にはディベート指導で世界的に有名な Dr. Joseph Zampetti (Illinois State University) らを迎えます。詳細はHP などでお知らせします。